

メルカテッロの家再生の記録 —再生デザインを通して考えるストックの活用—

KS
DP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet

AUGUST
2013
VOL. 130

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』



図1.メルカテッロの家¹⁾

メルカテッロの家の再生を通して

1993年にイタリアのメルカッテロで、築550年の廃屋同然の家を手に入れた。それから18年かけてこの古民家の再生デザインを行った。この地域では街並みを保存するため、地区詳細計画が緻密に定められており、むやみに建築に手を加えることはできない。また修復をしていく中で、イタリア人の「PATINA（パティナ＝古色・わび・さび）」の感覚とその地域の持つ類型を厳格に守るという意思に気付かされた。そして18年という時間を経て再生したものは、当初思い描いていたものとはまったく異なる姿であった。再生デザインとは「まず自分の思いが

あって、それをどう入れるか」ではなく、「モノがあって、それとどう向き合うか」ということなのである。

ストックの活用

ストックの中で余分なものは排除する必要があるし、失われたものを復元する必要もある。そして新しい表現を取り入れて、もとあった「モノ」の力を引き出すという視点も必要となる。新しいデザインに出会って、そこにあった「モノ」が生き返る。これからの建て替え事業では「環境、文化、歴史の高度利用」つまりストックの観点からデザインすることが重要なのである。

1. メルカテッロ・スル・メタウロ

1.1 メルカテッロの地勢

メルカテッロ・スル・メタウロ（以下メルカテッロ）は中部イタリア、マルケ州の西の端に位置する人口約1500人のまちである。

フィレンツェから約90km、標高は429mで周辺はそれよりも高い山に囲まれている。建物が密集した卵形の地域が旧市街地であり、その真ん中にコミュニティの中心となる広場が置かれる。オープンな広場の裏の道に入ると一転、住宅が建ち並ぶ。外縁部に広がる旧市街地周辺の新興住宅地は、1980年代のメルカテッロでの高度経済成長期に興ったものである。

1.2 廃屋同然の町家

メルカテッロの町家を手に入れたのは1993年の事である。修復中に発見した小屋組の礎石に刻まれた年代から築550年だと推定でき、戦後ほとんど使われてなかったため、廃屋同然の家であった。

当時、外壁のモルタルも欠け、落ちて道を通る人に当たるのではと不安になるほどであった。ベネチアンブラインドも無くなったり欠けたりしていた。建物の構造に問題はなかったが、屋根がかなり酷い状態で葺き替えが必要であった。以前は車の整備工場であったようで、1階はほとんど倉庫で土間のような状態であった。自動車の下にもぐるピットもあった。玄関は3つあり、2階3階が居室という構成であった。壁体面積を含めた全体の面積は641㎡、(内法面積は517㎡)。部屋数は13部屋あり、小さなものも合わせると24部屋もある、大変大きな家である。

2. 歴史的な中心市街地の景観保存

2.1 イタリアの登記

日本の登記簿とイタリアの登記簿は書き方が異なる。考え方が違うのだ。日本でいう「土地」はイタリアでいう「室」にあたり、建築物の登



図2. メルカテッロの位置



図3. 周辺に広がる雄大な風景²⁾



図4. メルカテッロ・スル・メタウロ³⁾



図5. 当時の実測図 左から1階・2階・3階平面図 (作図：井口勝文)



図6. 廃屋同然だった町家⁴⁾

記は「室」を登記するのである。イタリア旧市街の多くの家が、構造的に1つながりであり、分けようと思っても分けることができない。互いに戸境壁を共有することで、1つの街区が1つの建物として存在して

いるのである。なので建物の部屋が登記されて、地番は登記されない。したがって、原則として戸境壁（構造壁）は変更できず、増築はできない。逆に、現に存在していなくても、登記簿にある建物は新築（復元）できる。歴史的な中心市街地（CENTRO STORICO）は、この建物の登記制度と次に示す、地区詳細計画によって、その存在を担保されているのである。

3. 守るべき基準

18年間再生デザインを行う中で、イタリア人の感覚の中にすでに守るべき基準が根付いていることに気付いた。彼らの感覚によって、メルカテッロの景観は保たれているのである。

■基本は元の形、元の色にすること

重層（ストック）される都市、建築では、どの時代に戻すかの判断が重要で学問的判断とデザインとしての判断の2つの視点がある。文化財の場合、学問的判断が必要となってくる。それ以外の場合も時代設定がデザインの決め手となってくる。

■制度・基準が定着して既に慣習・文化となっている

市民、職人が景観の価値（デザイン基準）を常識として共有している。イタリア人は決してモノを捨てることはなく、釘一本であっても再利用する。日本でいう文化財の修復レベルの事が一般的なものである。今回の修復の際も使えるものは徹底的に使っている。窓のベネチアンブラインドは職人に修復してもらい再利用している。

■「類型学的デザイン」が定着している

判断の最後のよりどころは町の類型学（TIPOLOGIA）である。

1970年から調査をしてきたトスカーナに魅了されていた当時の私は、無意識の内にメルカテッロにトスカーナのデザインや色を取り入れようとした。すると「それはこの土地の類型ではない」と言われた。その地域の人が、その地域の類型を理解し、受け継いでいるのだ。そうして再生して町家にはメルカテッロの色や材料が使われている。場所を読む類型学的感性を身につけることが必要なのである。

4. 「モノ」の力

4.1 負けてしまった自分の想い

18年前に建て替えを始めた頃の自分と今の自分は考え方がずいぶん変わっている。その場所（建築）の力に負けてしまったのである。「まず自分の思いがあって、それをどう

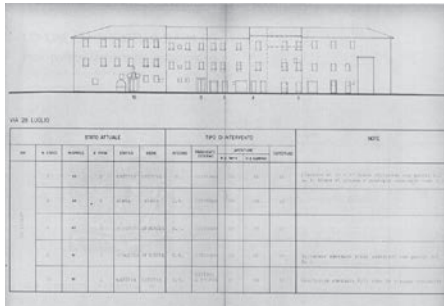


図7.メルカテッロの地区詳細計画

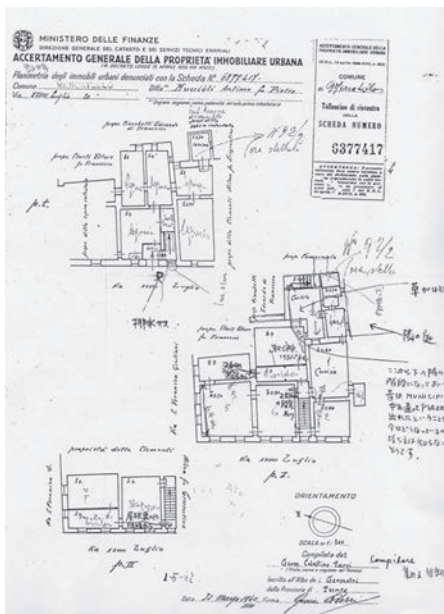


図8.イタリアの建築登記番号図



図9.保存されるメルカテッロの街並み⁵⁾

入れ込むのか」から「まずモノがあってそれとどう向き合うか」に変わっていった。メルカテッロの場合、モノとはこの建築のことであり、この建築にどうあるべきなのか尋ねながらデザインを行った。

4.2 カクテルデザイン

新旧を対置させるデザインがあることは我国でも知られている。この再生デザインを通して、新しいものと古いものとが混然一体となって生まれるデザインがあるのではないかと考えるようになった。それをカクテルデザインと言っている。おいしいカクテルを作るように新旧を混ぜ合わせて、ストック=そこにある「モノ」の力を引き出すデザインが必要なのである。新しいデザインに出会って、そこにあったものが生き返る。そのモノだけの存在感ではなくて、背景の中で生きてくる存在があることを知った。新しいものをどこにいれるのか、古いものをどう残すか、それは創造的選択であると言える。

4.3 PATINA のデザイン

ヨーロッパが都市デザインにおいて「PATINA(古色・わびさび)」という感覚を取り入れようとしているという。私もこの再生デザインを通して気がついた感覚である。イタリア人は「わび・さび」というどこか日本的な感覚を持っているのだ。建築は結局わび・さびを表現していくものなのではないかと感じるようになった。

PATINAには時間の経過が必要である。従来の団地建替事業の様に全てを新しくしてしまえば、PATINAを感じることはできない。そこにある「モノ」が持つ時間=古色を残し、ストックとして活用する

ことが必要であり、PATINAを感じるようデザインしていくことが求められるのである。しかし、古い振りをしてはいけない。新しいものは新しく、古いものは古いまま見せることが重要である。

5. 団地再編とストック利用

従来の団地建替事業では、土地の高度利用に重点が置かれていた。したがって建物を新築し、増床することで効率的に収入を得ることになる。しかし、メルカテッロでの再生デザインをもとに考えると、これからは「環境、文化、歴史の高度利用」を考える必要があるといえる。そこで行われることは風景を創ることである。その前提は保存・修復であり、場合によっては増築・減築という事になる。つまり余分なものは排除し、失われた大切なものは復元し、新しい表現を取り入れて「モノ」の力を引き出すという創造的選択が必要となるのだ。ストックの観点からデザインすることが重要なのである。

団地再編において、ストック利用の観点から PATINA の感覚を取り入れ、そこにある「モノ」の力を引き出すような新しいデザインを取り入れることが出来れば、全体として様々なものが混然一体となった、豊かな住環境の創出に繋がるのである。

出典

1)2)4)5)6)7)8)9) 撮影：井口勝文
3)Google Earth

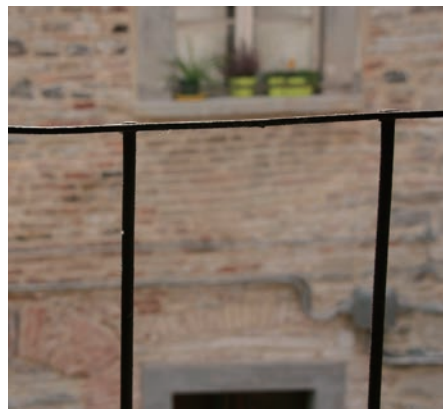


図 10. 背景の中で生きてくる存在⁶⁾



図 11. PATINA を感じるようデザインする⁷⁾



図 12. 年代が重なるカクテルデザイン⁸⁾



図 13. 古い材(濃)と新しい材(明)の混在⁹⁾

『メルカテッロの家再生の記録』

—再生デザインを通して考えるストックの活用—

レクチャー：井口 勝文 (INOPLAS 都市建築デザイン研究所)

記録・作成：関谷 大志朗 (関西大学大学院 博士前期課程)

倉知 徹 (関西大学 先端科学技術推進機構)

(講演：2013年6月4日)

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究(平成23年度~平成27年度)」によって作成された。

発行：2013年8月

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>